



歴史を開く水中考古学

2013年2月5日
NHKラジオ

井上たかひこ 水中考古学者・作家。1943年茨城県生まれ。70歳
法政大学卒業後、米国テキサス州立テキサスA&M大学大学院修了。
同大併設の水中考古学研究所にて「水中考古学の父」と呼ばれるジョージ・バス博士の薫陶を受け
東洋人として初のフォーマルな水中考古学の基礎教育を修了、学位を授与される。
この間、世界的に著名な水中遺跡の発掘調査に数多く参加した。

すいちゆうこうこがく【水中考古学 underwater archaeology】

地盤の沈下や水位の上昇によって海、湖、池沼、河川などの水底に没した遺跡や、沈没船などを対象とする考古学の一分野。海中で作業するものを海中考古学と呼んで特に区別することもある。潜水技術や排水機器の進歩によって科学的な方法による調査が可能となり、ようやく近年、考古学の一分野として認知されるようになった。水中での作業という制約を克服すれば、地上の発掘では得られない貴重な資料を入手することも可能である。たとえば難破船の場合、交易品や生活用具などが一時に大量に埋没しており、これを調査することによって当時の船舶技術、交易ルートから日常雑器にいたる多様な事物が判明する。

水中考古学は冒険のイメージがあり、どういう物が出てくるのかワクワクする。春に準備をし、夏に潜り、秋から冬にかけて結果をまとめる。潜っていて海底が見えないのはこわい。

現在、千葉の勝浦沖で明治2年に熊本藩がチャーターした米国の黒船(全長21m、木造船、当時の最大級のレベルの船)がしきで沈没していて、その船の調査をしている。
好きなことが出来るのは幸せ。

水中考古学のたのしみは、どんな宝物がでてくるか？
ロマンチックな体験ができる、謎解きの楽しみなどがある。

ヨーロッパの地中海だけでも10万隻の船がねむっているという。全世界では何十万隻もの船が海底に眠っている。
日本の周りでは216隻の船が眠っていると文化庁が発表している。実際は20隻ぐらいしか調べられていない。

水中考古学は1960年から始まった学問で50年の歴史。
海底から引き揚げた文化財の復元は大変で、専門家が担当している。歴史的価値のあるものが眠っている可能性がある。
今から3000数百年前の交易船、フェニキア人の船？から、陸上では見つからないキプロスの銅が発見されている。

歴史の解明に水中考古学は欠かせない。
若い頃はヨットで楽しんでしたが、42歳の時に、自分の好きなことをするのが良いと考え、米国に留学し、ジョージ・バス博士に学んだことが、この世界に入ったきっかけです。米国の大学は真剣に勉強をしないと落第をする。

超一級の遺跡は、ポートロイヤル、元寇船、クレオパトラの海中宮殿であろう。最近では電子工学が発達し、水中ロボットを使って新しい発見の可能性が出てきた。しかし日本では国、行政がサポートする支援体制が整っていない。通常、資金不足で動けない。大学では海洋大学、東海大学の二校のみ環境が整っている。

中国、韓国では国家がバックアップし、超一級の文化財を見つけている。国威をかけて調査をしている。
海の歴史の解明に金をかけない日本……………。
ユネスコ条約で100年たったものは水中遺産となる。

現在、勝浦沖の黒船の調査をしているが、将来、引き揚げてきたものを展示する博物館を作りたい。
また、水中考古学の本を出筆予定で準備をしている。

若者へのアドバイス！
「好きかどうかで仕事を選ぶと後で後悔しない！」



沈没船の宝は誰のもの？ そんな素朴な疑問など、意外とわからない海の中。昨年、長崎・鷹島沖で元寇(げんこう)船が見つかり、脚光を浴びる水中考古学について、トルコ沖での世界最古の沈没船の発掘などに携わってきた第一人者が解説する。

起源や発掘方法も興味深いですが、心ひかれるのは“ロマン”の部分。大地震で水没したクレオパトラの海中宮殿、深海3800メートルに沈むタイタニック号、東方見聞録にもある中国宋代の巨大船など、伝承をよすがに探し出された遺物の数々を見れば、水中に人生をかける人々の思いが理解できる。

ちなみに冒頭の疑問は、跋扈(ばっこ)するトレジャーハンターによる盗掘問題も絡み、まだ世界的な懸案。読めば水中からの新発見のニュースがいつそう面白くなること、うけあいだ。(成山堂書店、2600円)(辻)(2012年11月7日 読売新聞)